



JAPAN HERITAGE
日本遺産

山寺が支えた紅花文化(山形県)

素材研究 (国内)

芭蕉も俳句に詠んだ 紅花とともに花開いた山形の文化

7月は山形県の県花である紅花が見頃を迎える季節。この花から作られる紅餅は、特産品として古来より珍重され、この地に富をもたらす華やかな上方文化を伝えました。今回は2018年に日本遺産に登録された山形県の紅花文化をご紹介します。



山寺こと宝珠山立石寺



染料の元となる紅餅



伝統的な紅



夏の山形を彩る紅花畑

紅花栽培は、「山寺」(山形市)こと、宝珠山立石寺を開山した860年頃、慈覚大師らがもたらしたと言われています。最上川流域の肥沃な土壌と、朝霧の立ちやすい気候は紅花栽培に適しており、紅花栽培は山寺の寺領などを中心に、周辺へ広まりました。江戸時代、山寺を訪れた松尾芭蕉が「眉掃きを佛にして紅粉の花」と紅花畑の句を詠むほどに、紅花栽培はこの地域の一大産業となっていたのです。

紅花を発酵させ加工した「紅餅」は西陣織の染料や女性の紅、葉として重用され、北前船で京都や大阪に、羽州街道を通って江戸へ運ばれます。品質の良い山形産の紅花は人気が高く、江戸時代後期の最盛期には全国生産量の5〜6割を占めていたとか。馬1頭に積む紅餅約120キロは、「米の百倍、金の十倍」といわれる高値で取引されました。

紅花交易により山形各地には様々な文化が伝わりました。近江から伝来の雛人形は、今でも旧家や蔵などを開放して公開される春の風物詩。有名な夏祭り「花笠」にあしらわ



林家舞楽は衣装も紅花染め



芭蕉、清風歴史資料館



色とりも鮮やかな紅花寿司

れているのは紅餅です。また上方の座敷蔵と江戸の店蔵が融合した「蔵屋敷」は山形の豪商らが築いたこの地方独特の建築。蔵造りの建物に住居や店が入った重厚な建物で、現在は各地で資料館などとしても利用されています。

山寺を中心に 4市3町の広域観光を模索

日本遺産「山寺が支えた紅花文化」は山形市、寒河江市、天童市、尾花沢市、山辺町、中山町、河北町の4市3町で構成。現在の紅花観光は、山形市高瀬地区がジブリ映画『おもひでぽろぽろ』の舞台として知られるように、夏の紅花畑の景観が中心です。推進協議会では「山寺エリアを起点として、染付体験など紅花をテーマとした通年商品の造成や、構成市町にいかに入力するかを課題」として、広域観光への可能性を探っています。また現在東北を訪れる外国人観光客は、東北6県で日本全体の約1.3%に過ぎないことから、「外国人向けのガイドツアーや案内ガイドなどの整備も必要。日本の歴史文化に関心の高い欧米豪や台湾の方々に出羽三山や山寺の精神文化などもアピールしていきたい」と、山形のほかの素材とのコラボレーションも視野に入れています。今後はモデルツアーなども実施しながら、「紅花の本紅(口紅)や紅花染めの製品などとともに、魅力を発信していきたい」とも語っています。